

【研究の概要】

【研究テーマ】

多様な「観」を愉しむ道徳科学習

【問題意識】

「観」を表出することについて

- ・ 道徳的問題を自分事として捉えることができないために自分の考えをもつことができない。
- ・ 失敗することへの恐れや周囲の目を気にして自分の考えを率直に言葉にすることにはためらいがある。

「観」を愉しむことについて

- ・ 自分とは異なる価値観をもつ仲間と、互いの違いを認め合ったり、折り合いをつけたりすることに難しさを感じている。

【道徳科学習でめざす子どもの姿】

道徳科における多様な「観」を愉しむとは、自分を多面的・多角的に理解するための材料を集め、自分一人ではたどり着けない納得解に、仲間と一緒にたどり着くその過程を愉しむことである。そうすることで自ずと道徳科の目標である自己の生き方を深めることにつながると考える。

前提として表出する姿	自分の感じ方や考え方を伸び伸びと表現する姿 相手の感じ方や考え方に興味をもつ姿
感じる段階	教材の登場人物や仲間の考えを基に、多面的・多角的に考え、道徳的価値の理解を深める姿
調整する段階	多様な「観」を吟味し、自分とのかかわりにおいて自己の生き方について考えを深める姿

【研究の視点①】

多様な「観」を子どもから表出させるための手立て

【研究の視点②】

子どもが多様な「観」を愉しむための手立て

【研究内容】

1 自分の「観」を自覚し、納得解にたどり着く過程を愉しむための工夫

子どもの実態として、自分の考えをうまくもてないという傾向が見られる。例えば、導入で価値につながるような日常生活にかかわる発問をした際にはよく反応する子どもが、教材の内容に入った途端に反応が薄くなるという姿が見られた。これは、道徳的問題を自分事と捉えることができていないことが要因だと考えられる。

また、自分の考えはもっている、失敗することへの恐れや自信のなさから、周りを気にして自分の意見を率直に言えないという子どもの姿も見られた。

さらに、自分の考えをもつことはできているのだが、自分の考えに固執してしまう姿も見られた。仲間の考えを受け、折り合いをつけながら考えを深めたり、新たな考えを生み出したりという点に関して課題が残ると言える。

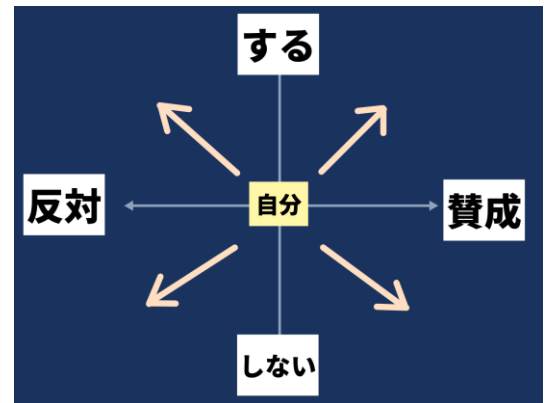
そこで、これらの課題をもつ子どもが「考えてみたい」「自分だったら」と、道徳的問題を自分事として捉え、自分の「観」を表出しやすくするために、また自分の考えに固執せず、仲間と認め合い、多様な「観」を愉しむために、以下の2つの手立てを講じる。

(1) 思考の可視化

子どもが、自分の考えを思考ツールに表す手立てを取り入れる。具体的にはスケールチャートや座標軸等を用いて、自分の心の位置を「見える化」する。

例えば、座標軸【図１】を用いた学習では、横軸を「価値への賛否」、縦軸を「実践の意志」と設定することで、子どもの内面にある漠然とした「観」を整理し表出しやすくなると考えている。

また、自分の考えを素直に表出することができない子どもにとっても、思考ツール上に自分の立場を表現するという段階を設けることで、心理的な安全性を確保し、自分の考えを言葉で表出しやすくなると考えられる。



【図１】

さらに、座標軸を通して仲間と考えを共有し、自分と異なる位置に配置した考えに対する「なぜだろう。」という気持ちを生み出す。これにより、子どもが「仲間の思いを詳しく聞いてみたい」という明確な目的意識をもって、仲間と主体的に対話できるようにする。

(2) 役割の固定化や入れ替え

昨年度までの役割演技・動作化の研究を活かし、役割の固定化や入れ替えの効果的な手立てを追究する。具体的には、考えを表出させる際に、あえて「反対の立場」や「教師が示した特定の役割」に立たせ、その視点から考えを述べさせるようにする。教材を自分事として捉えることができず、そもそも何を考えればよいか分からないという子どもにとって、役割を固定することは、考えをもつきっかけになるのではないかと考える。

また、自分の考えを率直に表出することができない子どもにとっては、自分の意見としてではなく、役割としての意見として表出させることで、心理的な安全性を確保し、内面にある率直な「観」を引き出すことができると考えられる。

さらに、違う立場や役割で考えを述べさせることは、自分の考えに固執してしまう子どもにも効果的であると考え。仲間の意見を取り入れ、考えを更新する姿が見られたり、反対の視点を経由し、自らの「観」を一段上のレベルで再構築する姿が見られたりすると考えられる。いずれの姿も「多様な『観』を愉しむ」姿として肯定的に評価する。

これらの手立ての有効性については、抽出児童の発話記録や振り返りの変容を、分析・考察することにより検証する。

1 主題名及び教材名

よさは伸びる、伸ばせる（「きいてるかい オルタ」：日本文教出版）

2 ねらい及び教材のあらすじ

A 4	【個性の伸長】	
	自分を変えたいと思いながらも変わることができない「ぼく」の葛藤について考えることを通して、変わるために大切なことに気付き自分のよさを積極的に伸ばしていこうとする態度を育てる。	運動が苦手好き嫌いも多く、自分に自信がもてない「ぼく」には、大切な相棒の「オルタ」がいる。新しいクラスで、変わりたいと思っていた「ぼく」は、ある出来事をきっかけに、オルタに支えられながら一歩を踏み出し、見違えるほどたくましく成長していく。

3 主題について

本主題は、自分の長所や短所を見つめ、教材の登場人物や仲間がもつ個性や生き方にふれることで、自分が変わるために大切なことに気付き、自分のよさを伸ばしていこうとする態度を育てることをねらいとしている。

個性とは、個人特有の特徴や性格のことである。自分のよさは、自分自身では分からないこともあり、他者と比較する中で見いだしたり、他者からの指摘により気付いたり、実感したりすることがある。また、自分では短所だと感じていたことが、他の人にとっては長所になることもある。そのため、仲間との交流を通して、個性に対する多様な視点や考えにふれ、自分自身を見つめ直すような活動を経験することは、よりよい自分をめざすために有効であると考えます。

このような学習をすることは、多様な仲間の「観」を吟味し、自己の生き方についての考えを深めていくことができ、子どもが自分らしく、よりよく生きようとする基盤をつくる上で大きな意義がある。

4 子どもについて

子どもは、これまでの道徳科学習において、スケールチャートや座標軸を用いて、全員が自分の考えを黒板上に表し、それを基に、仲間と自由に対話をする中で、自分の考えをもって授業に臨むことができるようになってきている。また、考えを可視化することによって、「あの人の考えを聞いてみたい。」と仲間の考えに関心をもつ姿も見られるようになってきた。さらに、自由に移動しながら対話をする時間を設けることで、「〇〇さんの意見を聞いて…」といった、仲間の考えを基に自分の考えを作り出すような姿も少しずつ見られ始めている。しかし、多様な仲間の考えを吟味し、自分一人ではたどり着けない納得解にまで考えを深めるには至っていない。

抽出児について

※ 個人情報保護の観点から、省略します。

5 研究内容

本主題における、多様な「観」を愉しむ子どもの姿

教材の登場人物（ぼく・タケシ・オルタ）や仲間の考えを基に、多面的・多角的に物事を捉え、新しい自分に変わるために大切なことに気付き、自己の生き方についての考えを深める姿。

○ 1：自分の「観」を自覚し、納得解にたどり着く過程を愉しむための工夫

導入では、事前に実施した「変わりたいことがあるか」というアンケート結果を示し、全員が変わりたいことがあるという思いをもっていることを共有した上で、変わることができそうかをスケールチャート上に可視化する。そうすることで、自分や仲間の考えを視覚的に捉えられるようにする。

展開では、ぼくやタケシ、オルタになりきって役割演技をさせる。役になりきって発表させることで、率直な考えを表出できるようにする。またここで得られた多様な視点を、自分を深めるための材料とし、道徳的価値の多面的・多角的な理解を図る。

終末では、再度スケールチャート上に考えを可視化することで、自分や仲間の考えの変容に気付くことができるようにする。その上で、考えが変わった子どもに理由を問うことで、新しい自分に変わるための多様な考えが表れるようにし、それらを吟味することで、新しい自分に向かって個性を伸ばしていこうとする姿を引き出したい。

6 本時の指導過程

学習活動及び学習内容（◇は発問）	教師の手立て
1 自分事として捉え、考え始める。 ○ アンケート結果の確認 変わりたいことがありますか ある…28人 ない…0人 ◇ あなたは変われそうですか。 ○ 学習テーマ 新しい自分になるために大切なことは？ 2 道徳的な価値の理解を深める。 ○ ぼくが「もういやだ。」と言ったときの気持ち ◇ ぼくは、どんなことを考えているでしょう。 ・ どうしてぼくばかり。 ・ やっぱりぼくは変わらない。 ○ それぞれの立場での考え ◇ タケシはどんな気持ちでボールを投げていると思いますか。 ・ ぼくを困らせてやろう。 ・ 一緒に遊びたい。 ◇ あなたがオルタなら、ぼくにどんな言葉をかけますか。 ・ 諦めないで。 ・ 頑張ればできる。 ◇ ボールをキャッチできた時のぼくは、どんなことを考えているでしょう。 ・ ぼくにもできた。 ・ 変われるかもしれない。 3 自己を見つめ、これからの自分について考える。 ◇ 新しい自分になるために大切なことって何でしょう。 ・ 苦手だと思いきまないこと ・ 勇気を出すこと ・ 挑戦すること ・ 自分は絶対できるという気持ちをもつこと 等 ◇ 今日の学習でどんなことを考えましたか。 ・ すぐには変われなくても変わろうという気持ち ・ 大切。 ・ 苦手だと思いきんでいたらいつまでも変わらない。 ・ 自分を励ましてくれる存在がいる。 等	○ 教材の前半部を範読した後、事前アンケートの結果を示し、全員が「変わりたいことがある」という思いをもっていると伝えることで、本時の学習を自分事として捉えることができるようにする。 ○ スケールチャート上に考えを貼らせることで、自分や仲間の考えを視覚的に捉えることができるようにする。 ○ 変われそうにないという子どもの意見を取り上げることで、変わりたい思いがあっても、新しい自分になることは容易ではないことに気付けるようにする。 ○ 役割演技を取り入れ、タケシの視点やオルタの視点など、視点を与えて気持ちを考えさせることで、率直な考えを表出できるようにする。 ○ 役割演技を通して、様々な視点から多角的に考えさせることで、「思いきまないこと」「支えてくれる仲間の存在」「成功することで得た自信」など、変わるためのヒントに気付くことができるようにする。 ○ 子どもの考えが、変わるためのヒントに繋がらないときには、「タケシはぼくのことを嫌いなのかな。」などと問い返すことで、変わるために大切なことに気付くことができるようにする。 ○ 「あなたは変われそうですか。」と問い、自分の考えを再度スケールチャート上に考えを貼らせることで、自分や仲間の考えの変容を視覚的に捉えられるようにする。 ○ 「変われそう」においた子どもに、その理由を問うことで、新しい自分になるための多様な考えを知り、変われないと思う子どもが、「変われるかもしれない。」という気持ちを高めることができるようにする。 ○ 学習全体の振り返りを記述させ、仲間と自由に交流する場を設定することで、仲間の多様な考えにふれ、自己の生き方についての考えが深められるようにする。

7 本時の評価の視点

教材の登場人物（ぼく・タケシ・オルタ）の気持ちについて考えたり、仲間の考えを吟味したりしながら、新しい自分になるために大切なことに気付く、自分のよさを伸ばしていこうとしている。

【道徳的価値の理解を自分自身とのかかわりのなかで深めているか】

8 当日の板書

